

# 東京学芸大学版『インクルーシブ保育』の実践研究Ⅱ

— 特別支援学校幼児の個別教育計画を活用した支援 —

○山内裕史 小泉浩一 伊東久美子 田口悦津子 大伴 潔 橋本創一 林安紀子

(東京学芸大学附属特別支援学校)

(東京学芸大学)

KEY WORDS: インクルーシブ教育 交流及び共同学習

(目的) 本校の幼稚部では 1978 年より東久留米市立 A 保育園と交流保育を行っている。交流保育は障害のない幼児と活動をともにすることによって、生活経験を広げ、社会性を育むことを目標としている。本研究では、インクルーシブ保育を「①どの子どもも活動に参加する、②障害のある子どもだけでなく、多様なニーズをもつすべての子どもへの支援する保育」と定義し、本校と東久留米市立 A 保育園との実践について検討することを目的とする。本研究Ⅰでは交流保育の概要を、本発表Ⅱでは特別支援学校幼稚部幼児の個別教育計画を活用した支援について報告する。

(方法) 個別教育計画を活用の手順を以下に示す。

## 1) 個別教育計画

【表1】: 幼児の支援ニーズにもとづき教員と保護者で協議して作成し、連携しながら指導を進める。個別教育計画は年度の前期と後期に作成し、前期と後期の末にそれぞれ評価を行う。

2) 個別の交流計画【表2】: 個別教育計画の内容も踏まえて、交流保育時の指導計画として、個別の交流計画を作成し、教員と保育士で指導に当たる。年度の前期と後期に作成し、前期と後期の末に教員が評価する。3) 学びの事例記録表【表3】: 交流保育の毎回の指導経過を学びの事例記録表に記録し、記録後の活動に役立てる。

## (結果)

本校 B 児は自閉症スペクトラム障害と診断され、「・好奇心が強く関心事に注意が向くと周囲の状況にかかわらず一方的に働きかける・簡単な要求を身近な大人に言葉で伝えられるようになってきている」といった実態がある。この実態に対する支援のニーズとしては、「簡単なやりとりをすること、活動参加に向けた支援」があげられる。交流保育は今年で 2 年目となる。前期の個別教育計画の立案時には「ちょうだい」「やって」等の要求を身近な大人(保護者や幼稚部教員)に言葉で伝えられるようになってきてい

た。そこで、交流先の保育園にもその範囲を広げていくことを考え、言葉によるやりとりを個別の交流計画に設定した。

東京学芸大学附属特別支援学校 個別教育計画(B)教育支援シート					
作成日: 平成 年 月 日		評価日: 平成 年 月 日		現在の学習状況	
長期目標	短期目標	主な支援場面	支援内容・方法	学校	家庭
挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	日常生活場面でのやりとり	教員と一緒に行う。	( )	( )
要求を相手に伝える。	要求を相手に伝える。	日常生活場面でのやりとり	教員と一緒に行う。	( )	( )
友達と一緒に遊ぶ。	友達と一緒に遊ぶ。	日常生活場面でのやりとり	教員と一緒に行う。	( )	( )

【表1】 個別教育計画と記入例

東京学芸大学附属特別支援学校 幼稚部 個別の交流計画(前期)					
作成開始日: 平成 年 月 日		最終評価日: 平成 年 月 日		学年 年 組 番 氏名: 担当:	
個別目標	具体的な目標	主な支援場面	支援内容・方法	学校	家庭
挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	日常生活場面でのやりとり	教員と一緒に行う。	( )	( )
要求を相手に伝える。	要求を相手に伝える。	日常生活場面でのやりとり	教員と一緒に行う。	( )	( )
友達と一緒に遊ぶ。	友達と一緒に遊ぶ。	日常生活場面でのやりとり	教員と一緒に行う。	( )	( )

【表2】 個別の交流計画と記入例

学びの事例記録表 (記入例: 5歳児男子)	
指導する個別教育計画の目標	学びの事例記録表
挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。
要求を相手に伝える。	要求を相手に伝える。
友達と一緒に遊ぶ。	友達と一緒に遊ぶ。

【表3】 学びの事例記録表と記入例

計画	長期目標 (個別教育計画)	短期目標 (個別教育計画)	支援場所
	個別目標 (個別の交流計画)	具体的な目標 (個別の交流計画)	
前期	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	学校 家庭 交流
	要求を相手に伝える。	要求を相手に伝える。	学校 家庭 交流
	教員と一緒に、園児と同じ遊びを楽しむ経験をする。	教員と一緒に、園児と同じ遊びを楽しむ経験をする。	交流
	教員の支援を受けながら、園児とかわって遊ぶ。	教員の支援を受けながら、園児とかわって遊ぶ。	交流
後期	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	挨拶や質問などの簡単なやりとりをする。	学校 家庭 交流
	要求を相手に伝える。	要求を相手に伝える。	学校 家庭 交流
	園児と一緒に遊んだり、活動したりする。	園児と一緒に遊んだり、活動したりする。	交流
	教員と一緒に、園児と同じ遊びを楽しむ経験をする。	教員と一緒に、園児と同じ遊びを楽しむ経験をする。	交流

【表4】 B 児の個別教育計画と個別の交流計画の一覧

保育園では園児や教員といった人よりも砂場やすべり台等の遊具やおもちゃに興味を示していた。教員が支援につき、本人が好きで砂場でアイス屋さんごっこなど、少しずつ園児と関わることができる遊びを繰り返していった。7月のある日、室内で盆踊りを踊っているときに、本校 B 児が初めて A 保育園児 S の手をとり、「こっちにきてよ」と言っているような行動を示した。その後 S から「一緒にやろう」と誘われ、とてもうれしそうな表情を見せた。このときは、表情だけで誘いには応じなかったが、その日の給食から S に誘われて、隣に座って給食を食べるようになった。S とのかかわりをきっかけにしてやりとりが拡がり、場面を設定することで、登園、降園時のあいさつや給食時に保育士へ「カレー、ちょうだい」「牛乳おかわり」といった要求を言葉で伝えるようになった。教員や遊具を介して、園児と遊びを繰り返していき、園児が B に声をかけたり、かかわったりすることが増えてきた。朝の体操では、好きな曲や幼稚部でも遊んできたダンスの時に、園児を意識しながら、子どもたちの輪に入って遊ぶことが増えた。芋ほりでは、同じグループの園児が掘っているところを手伝いにいき、とった芋を園児と籠に入れて運び、保育士に焼き芋のおかわりを要求するなどしていた。交流散歩では 20 分の道のりを園児と手をつないで歩くなど、自分から保育士や園児にやりとりやかかわりをもととする様子が多く見られるようになった。交流保育がない日でも、登校時に「〇〇保育園に行く〜!」と言って交流保育を楽しみにするようになった。

(考察) 個別教育計画で立案された指導は交流保育の場で具体的な課題となり指導された。毎回の交流保育の指導とその振り返りが学びの事例記録表で行われ、次の交流保育の指導に生かされた。個別の交流計画、学びの事例記録表の活用は個別教育計画の指導を交流保育の場で具体的な指導となり、毎回の評価と改善を伴った連続的な指導の実践につながった。

(文献) 東京学芸大学附属養護学校 (2005) 研究紀要 第 50 号. 東京学芸大学附属養護学校 (2006) 研究紀要 第 51 号. (YAMAUCHI Yuji, KOIZUMI Koichi, ITO Kumiko, TAGUCHI Etsuko, HAYASHI Akiko, OHTOMO Kiyoshi, HASHIMOTO Soichi)